

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 井上 岳彦

【所属】(助成決定時) 札幌学院大学・非常勤講師

【研究題目】ロシア仏教皇帝像の多様性に関する比較研究：カルムイク人とブリヤート人の言説分析を中心に

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、ロシア帝国の仏教徒がどのようにロシア皇帝を菩薩として心に描いたのかということについて、カルムイク人とブリヤート人の事例の比較によって明らかにすることを目的とする。報告者はすでに、カルムイク人僧侶がキリスト教徒であるロシア皇帝を菩薩の化身として想像し、旧来の「チベット仏教世界」を変容させることで信徒のロシア帝国社会への統合を図ったことを明らかにした。しかし、ロシア帝国全体における仏教イデオロギーの多様性を解明する必要がある。そのため本研究は、ユーラシアの仏教徒社会を多様な仏教イデオロギーの交錯する言説空間として捉え直し、ユーラシア覇権競争に対する仏教徒の多様な主体的な関与を考察することで、当時のチベット仏教社会のダイナミズムを描き出すことを試みた。

【研究の内容・方法】(800字程度)

二回の海外調査(アストラハンとイルクーツクの公文書館)で主要な史料を収集し、特に仏教僧侶が当局に宛てた請願書の中に現れるロシア皇帝の姿に注目することにした。さらに、ロシア語、ブリヤート語、カルムイク語の史料を比較分析し、個々の仏教社会で表現されるロシア仏教皇帝像の特殊性を抽出することを目指した。2015年8月に千葉県幕張で開催された国際中欧・東欧研究協議会(ICCEES)第9回世界大会では、ロシア帝国と仏教社会に関するパネル“Buddhism as an Engine of Cross-Border Interaction in Europe and Asia”を組織し、本研究で得られた成果について口頭発表した。このパネルの参加者であったエストニアとインドの研究者とのあいだで、今後の連携強化と共同研究の必要性を確認することができた。さらに、本研究の成果の一部を学術誌『スラヴ研究』に投稿した(本報告書作成時には採択未定)。

以下では、二度の海外調査について述べる。

①調査地：アストラハン(2015年2-3月)

帝政末期にカルムイク人のあいだで白ターラー菩薩信仰が広まった過程について、アストラハン県の動向から読み解く必要がある。この作業を通じて、ロシア仏教の統一運動と地方の仏教社会の関係が明らかになると考え、アーカイヴ史料を調査した。

②調査地：イルクーツク(2015年9月)

ウラン・ウデではなくイルクーツクを調査地に選んだ理由は、ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・仏教学・チベット学研究所のN・ツィレンピロフ氏がすでにウラン・ウデにおいて、多くの史料を明らかにしているからである。そのため従来あまり利用されてこなかったイルクーツクの史料から分析するために、調査地をイルクーツクに定めた。しかしイルクーツクの公文書館では、テーマが警戒されたのか十分に史料を閲覧させてもらえなかった。

【結論・考察】(400字程度)

残念ながら仏教皇帝像に関する史料を十分に見つけることができず、カルムイク人とブリヤート人の仏教皇帝像を比較するという本来の目的を十分に果たすことはできなかった。しかしそのかわり、ロシア帝国において仏教ナショナリズムが急速に高まった背景に関する様々な史資料を集めることができた。なかでもア

ストラハンでは、現地でもまったく知られていなかった新史料を発見した。この史料は20世紀初頭のカルムイク人仏教僧と中国の山西商人の関係を示すものだった。ロシア科学アカデミー・カルムイク人文学研究所の論集で発表したところ、現地の研究者から大きな反響を得ることができた。

本研究の結果、以下の2点が明らかとなった。1) 報告者も含めて、これまでの研究はカルムイク人とブリヤート人をチベット仏教の枠内でのみ考察してきた。しかし本研究を通して、彼らの仏教ナショナリズムをより広い仏教圏のなかに位置付けることが可能であり、位置付けるべきであることが分かった。2) カルムイク人やブリヤート人にとって新しい仏教知識が流入したことが、多様なロシア仏教皇帝像が誕生する背景にあった。この知識の流入は聖地巡礼や遊学、ロシア帝国の仏教学者の介在によるものだった。仏教徒と帝国知識人の関係については、今後さらに解明していく必要があるだろう。このように本研究は、ロシア帝国内の仏教徒に関する研究をさらに発展させる契機になった。